

異学年による学び合いを生かした「コンピュータ活用」の学習

—複式中学年「ローマ字入力名人になろう！」の実践を通して—

佐藤 健

1 はじめに

中学年における「コンピュータ活用」のねらいは次の通りである。

自分の思いを文章で表現することで、コンピュータのいろいろな機能に慣れ、親しむことができる。

文部省（当時）は国際理解、情報、環境、福祉・健康などを総合的な学習の内容として例示した。本校では、コンピュータ活用を通して、子どもたちが生活をより豊かにしていくことを大きなねらいとして設定している。では、実際にコンピュータを活用することで子どもたちにどのような力を付けていくことができるのであろうか。小島宏氏は、コンピュータ活用学習の類型とテーマとして、次の5点を示している¹⁾。

- 1) コンピュータ活用を目的とするタイプ
- 2) コンピュータを課題追究の道具として活用するタイプ
- 3) コンピュータをコミュニケーションの手段とするタイプ
- 4) コンピュータを表現の手段とするタイプ
- 5) 「情報」を課題としてコンピュータを取り扱うタイプ

第4学年の国語科で、子どもたちはローマ字の学習を行う。3・4年生が同じ教室で学ぶ本学級においては、4年生が行っているローマ字に3年生も強い興味を示している。中には、4年生が顔負けするくらいにローマ字に親しんでいる児童もいる。本実践では、小島氏の指摘する「4）コンピュータを表現の手段とする」に着目したい。国語科の学習を生かし、3・4年生が教え合い励まし合いながらローマ字入力の技能がつくような展開を試みた。具体的には、次のような学年別のねらいを設定した。

【3年生】ローマ字表や4年生の支援をもとに、挿絵を取り入れた「季節の詩」を作成することを通して、ローマ字入力に慣れ親しむことができる。

【4年生】ローマ字の仕組みを3年生に教えながら、挿絵を取り入れた「季節の詩」を作成することを通して、ローマ字入力の技能を高めることができる。

複式学級は、同じ教室で学年の違う子どもたちが学び合い高まり合っていくことに大きな特色がある。教室での学習は、その学級の伝統として、次の学年に引き継がれていく。本実践は、その意味でも価値があると捉えている。

2 実践事例

(1) 単元の概要

① 「ローマ字入力名人になろう！」について

低学年では、ペイントツールを活用した「絵を描く」学習が中心である。また、文字パレットや手書き入力を使った操作も学習してきている。中学年から本格的なキーボードを使った学習に移行すると言える。中学年以降の子どもたちにとって、インターネットで検索するにせよホームページを作成するにせよ、文字入力が欠かすことのできない操作とな

ることは言うまでもない。しかし、ともすると文字入力の子どもの速い子どもがそれらの活動の中心となり、他の子どもたちはその様子を伺っているという実態が見られなくもない。そこで、本単元では、子どもたちが楽しみながらキーボードの操作に慣れ親しみ、どの子どももその子なりの操作技能の獲得を目指していきたいと考えた。約50のキーの位置を覚えなければならない「かな入力」に比べ、「ローマ字入力」は、20強のキーを覚えることで習得できる。また、この時期の子どもたちにとって、ローマ字は身の回りにあふれているだけでなく、魅力的な対象とも言える。まず、数字キーのブラインドタッチから始め、母音の5つのキー、さらに「サ行」「カ行」へと練習を重ねることで、子どもたちが楽しみながらキーボードの操作を習得できるように単元を構成していく。

指導にあたっては、まず、一人一台のコンピュータを使いながら、3・4年生でペアを組んで学習に取り組めるような場を設定する。4年生はこれまでに国語科でローマ字の学習を行ってきた。常に4年生が隣にいて、3年生は支援を受けながら、逆に4年生は、3年生を支援しながら、学習を進めていけるようにしたい。また、キーボードの操作にあたっては、まず、数字キーのブラインドタッチを取り入れる。ホームポジションの意味を知ること、文字キーにも同じような機能があり、練習を重ねることで技能が身に付いていくことを自分自身で実感できるようにしたい。さらに、単元の終末では、国語科の学習で積み重ねている「季節の詩」をこれまでに習得した技能を使って作品にする活動を取り入れる。自分の創作した作品が活字になり、それに挿絵が付くことは子どもたちにとって意欲のわきやすい活動である。そのことから、様々なコンピュータを活用した表現活動に広がっていくようにしていきたい。

②指導内容と計画（全6時間）

第一次	キーボードと友だち	1時間
第二次	ローマ字入力の達人	3時間
第三次	「季節の詩」をローマ字で	2時間

(2) 実践の概要

① 第一次「キーボードと友だち」

キーボードは3年生の子どもたちにとっては、あまり馴染みのないものである。それに比べ4年生は、これまでのコンピュータ活用の学習で個人差こそあれ、かなり親しんでいる。そこで、1時間使って、校歌をローマ字で入力する練習を行った。校歌を選んだのは、子どもたちにとって身近なものであり、キーボード操作の進み具合を互いに知り合うことが容易だからである。事前にキーボード操作のプリントとローマ字一覧表を配布した。それらを活用したり教え合ったりしながら、文字キーの位置、漢字変換の仕方、特殊な文字の入力方法などを習得していった。

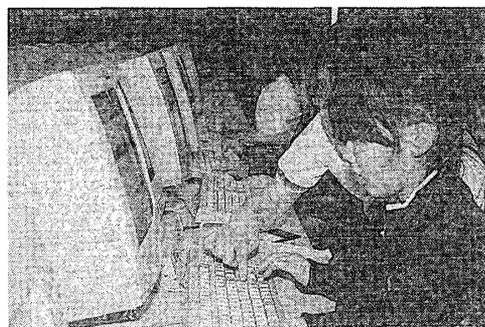
②第二次「ローマ字入力の達人」

第二次では、「ローマ字入力の達人」と題し、子どもたちが楽しみながらホームポジションを覚え、できるだけキーボードを見ないで文字入力できるようにした。

まず、数字キーを使ってブラインドタッチの練習を行った。数字キーは電卓同様、規則的にキーが配列されている。中央の「5」番キーに「・」が付いており、ここが基本のポジションであることを伝えた。子どもたちは、「5 5 5」「4 5 6」「6 5 4」さらには、「1 4 7」「2 5 8」「3 6 9」と縦横、キーボードを見ることなく楽しそうに入力の練習に取り組んでいた。「30秒で1～0まで、いくつ打てるでしょう」などの指示を出した。子どもたちは、練習を重ねる毎に回数が増えるのを実感していた。

次に、文字キーでの入力に移った。ここでは、数字キーで習得したホームポジションが役に立つ。基本は「イウオアエ」の母音の5つのキーである。右手を使った「イウオ」、左

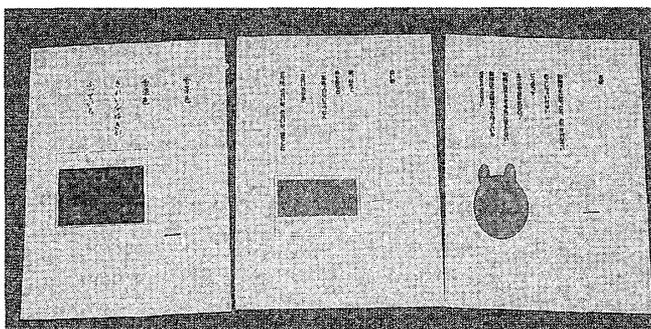
手を使った「アエ」をキーボードを見ずに打てるように練習した。練習を重ねるうちに上達していくのが子どもたち自身にもつかむことができたようである。全員の子どもがキーボードを見ずに母音の5つのキーが打てるようになると、「カ行」「サ行」への練習に移った。学習の導入で1分間に五十音を何文字打つことができるか、学習の終末では何文字に変わったかを繰り返し行った。



〈ここはこうやって……〉

③ 第三次『季節の詩』をローマ字で」

第三次は、学習の成果を作品に残していくことにした。これまでに国語科で作成した「季節の詩」の中で一番のお気に入りの作品を活字と挿絵とで作成するものである。挿絵については、低学年の段階で既に習得している。子どもたちは、できあがった作品がカラーになってプリントアウトされる様子に満足そうであった。



〈子どもたちの作品から〉

3 実践を終えて

考察を本実践のねらいに照らして、述べてみたい。

3年生のねらいは、「ローマ字表や4年生の支援をもとに、挿絵を取り入れた『季節の詩』を作成することを通して、ローマ字入力に慣れ親しむことができる」であった。慣れないキーボードとローマ字であったが、4年生の支援を受け、楽しみながらローマ字入力に取り組むことができた。

4年生のねらいは、「ローマ字の仕組みを3年生に教えながら、挿絵を取り入れた『季節の詩』を作成することを通して、ローマ字入力の技能を高めることができる」であった。4年生は、1年早くキーボードの操作に取り組んでる。その自信が支えとなって、3年生を支援しながら、技能を高めることができた。

4 おわりに

本校のコンピュータ活用の学習は、操作技能の習得のみを目指しているのではない。コンピュータを有効に活用することを通して、生活をより豊かにすることをねらっている。しかし、そのためには、技能を確実に身につけていることが前提である。今回の実践を通して、子どもたちの習熟の速さには驚かされた。実践後も、教室のコンピュータを使い、入力の練習に取り組んでいる子どもの姿が見られる。この力が、今後のコンピュータ活用に生きて働くものと期待している。

〈参考文献〉

1)小島宏編、「コンピュータ活用学習の展開と支援の方法」, 明治図書, 2000.